

四畳半に見る日本文化と住まい方

畳が部屋の広さを規定する日本建築において、基準的単位ともいえる四畳半。基本的な部屋の広さとなったのには、どのような歴史の経緯があり、またそこでは、どのような人間の営みがあったのか？
建築史家であり、建築家でもある藤森照信さんに聞いた。

建築史家・建築家
藤森照信

●ふじもり・てるのぶ 1946年長野県生まれ。工学院大学教授。専攻は近代建築、都市計画史。91年、「神長官守矢史料館」で建築家デビュー。『藤森照信の茶室学』（六耀社）、『フジモリ式建築入門』（ちくまプリマー新書）など著作多数。

日本建築の最小単位

日本の建築には世界でも珍しく、面積に規格があるんです。これは、世界では見られないことです。

規格ができたのは、畳のせいです。畳は一定の大きさ・形をしているから、それに合わせて部屋の大きさ・形も自ずと決まったんですね。外国

には畳みたいに広さを規定するものがないから、部屋の大きさはつねに「適宜」なんですよ。

畳ができて以来、世の中に畳が広がった中世ぐらいに、日本建築の基準となる大きさの部屋ができてきます。

その一つが九間ここのまです。九間は三間（約五・四メートル）四方の九坪。畳でいうと十八畳の、正方形の空間にな

いたし、歌の会を開いたり、宴会をしたり、美術品の鑑賞などにも用いられた。

人を招くための部屋として九間が使われる時代は長く続いたのですが、時を経るにつれ、用途に応じた小さな部屋が登場し、四畳半もその流れの中で生まれます。

たとえば、室町幕府の八代将軍である足利義政が、一人で茶を喫したり、書物を読んだり、自分の時間を楽しむための部屋。これなんかは四畳半です。

京都にある慈照寺（銀閣寺）には、義政の持仏堂として建てられた東求堂とうくどうという建物があります。その北向きの一角に「同仁齋」と呼ばれる書齋があるのですが、ここが義政にとつての個人的、また趣味的空間である四畳半なんです。

将軍だつて使っているくらいです

から、四畳半は決して貧しいがゆえの狭小空間というわけではない。一人であるのにふさわしい広さだということ、四畳半がで上がるんですね。

最初は九間で飲まれていたお茶も、時間の経過とともに部屋がどんどん狭くなって、千利休のころ、室町時代の末期あたりには、四畳半が茶室の基本になります。八畳や六畳、あるいは三畳や二畳などの茶室もありましたが、最終的にいちばんスタンダードになったのは四畳半でした。

茶室の場合は、四畳半より狭い部屋を「小間」といい、四畳半より広い部屋を「広間」といいます。また、四畳半を四つ並べると九間になります。

つまり、日本の伝統的な部屋は四畳半より大きくなるか小さくなるかで考えられるわけで、四畳半は日本

建築の中でベースとなる広さの単位だといえます。数列でいうと「一」にあたるような、四畳半はまさに基本的単位なんです。

草庵から長屋まで

茶室といえは四畳半となったのにはそれなりに理由があつて、なかでも草庵の存在が、かなり影響しているといえます。

草庵とは俗世から距離を置いた隠者や世捨て人たちが郊外に結んだ庵のことで、その多くが四畳半でした。西行や兼好が住んだ一人住まいの庵、あるいは鴨長明の『方丈記』に出てくる一丈四方の庵などがそうです。方丈は四畳半よりやや広いのですが（方丈は約三・三メートル四方、四畳半は約二・七メートル四方）、生活を営む上での実用的スペースは四畳半といつ